

くじら日記

太地町立博物館から



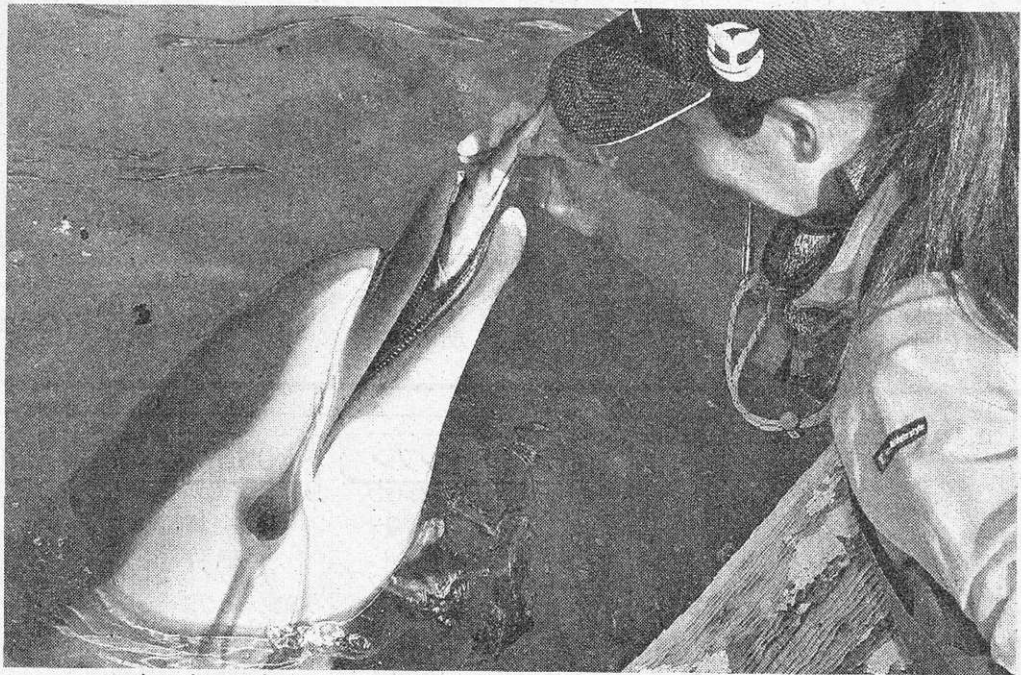
今年1月10日、イルカプールで飼育するスジイルカの雄「ムク」に異変が起こりました。

給餌の時間、飼育員が餌を持ってプールに足を運びましたが、近づいてきません。投げた餌にも反応せず、食欲がありませんでした。観察を続けると、次第に遊泳姿勢が不安定になり、表層を漂ったすえ、水槽壁面に衝突しました。明らかに異常事態です。レスキューは急を要します。まず溺死を防ぐためムクを抱きかかえ、同時に診療に必要な機材をかき集めました。すべての準備が整うと、駆けつけた飼育員がムクを担架で担ぎ、水を張ったコンテナに運び込みました。

鯨類の診療で最初に行うのは、体調を崩している原因の究明、つまり診断です。

体温は35・8度で、平熱かやや低めでした。次は血液検査。炎症の有無や免疫反応の

「ムク」に異変



元気になって魚をもらうスジイルカの「ムク」＝太地町立くじらの博物館

懸命の看護で元気に

異常などがわかる白血球数は正常範囲内か低め。しかし、腎機能の状態が読み取れる血中尿素窒素やクレアチニンは高値を示し、体液の状態がわかる電解質も異常を示していました。深刻な泌尿器系の疾患が考えられました。

大変なのはここからでした。的確な診断と治療を施したとしても、自力で泳ぐことができなくなったイルカをプールに戻すことはできません。尾びれの血管から治療薬や製剤を投与する輸液療法を続けながら、昼夜介助すると腹をくくりました。2時間ごとの交代制で臨みます。

夜が更け、しんと冷え込みました。静寂の中、一人でムクを見守ることが心細くなります。あっという間に冷えるコンテナの水にお湯を足し、ストープもたぎます。適宜、体勢を直してやり、負担を減らしました。体が乾燥しないように表面をぬらしてや

り、体温や呼吸にも注意を払って異変を見落とさないようにします。

回復に向かうか否か、これまで幾度となく直面してきた場面ですが、いつも「飼育者としてどこまで動物に尽くすことができるか」を問われて

いる気がしてなりません。治療開始から3日たち、ようやく血液検査に回復の兆しが見られました。輸液療法を継続したためストレスの懸念もあり、プールに戻すことを決めました。沈んだりしないか？ 壁にぶつかったりしないか？ 不安は拭えませんが、用心に用心を重ね、慎重に

ムクをプールに入れました。すると、尾びれを力強く動かして泳いでいるではないですか。スタッフの努力が報われ、万感の思いがこみ上げた瞬間でした。その後も治療は継続し、現在、幸いにもムクはすっかり元気になっています。

(太地町立くじらの博物館 副館長 稲森大樹)

原則第1日曜日に掲載します。